

浪江の

こころ通信

・第27号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏（7県）の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ

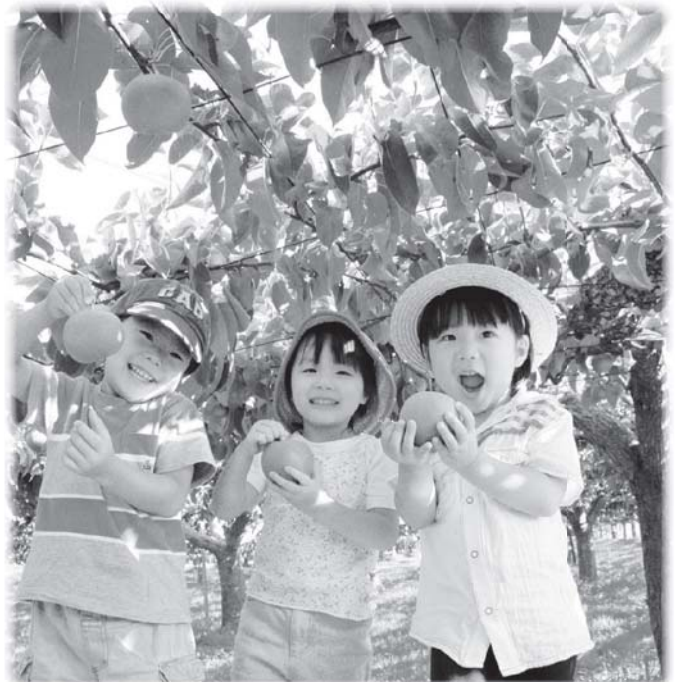
再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から2年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第27号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4218





橘 弦一郎さん(川添)

取材者：一般社団法人葛力創造舎 下枝
取材日：8月11日

「なみえ」を子どもたちに残していきたい



▲橘 弦一郎さん (中央左)

浪江焼麺太国集合写真▶



「家族は地域と会社が支える。」
震災前から浪江のまちづくりに携わってこられた橘さんに、震災前からこれまでの経過、まちづくりについて感じていることをお聞きました。

■震災前から今まで：
震災前は、浪江町川添に住んでいました。震災後は一度、滋賀県に避難をしました。本当は滋賀県から福島に戻らないと決めていたけれど、なみえの町おこしをしていくこともあり、再び戻ってきました。嫁は滋賀県に残してくるつもりだったけれど、

浪江町商工会青年部に所属していますが、時間を拘束され、家族との団らんの時間が減ってしまう中で青年部に入ることに意味があるのかわからなくて、初めはいいや始めた活動でした。浪江焼麺太国も本当に町おこしできるのか疑心暗鬼でした。そのとき先輩に言われたのが、家族は地域と会社があって成り

■家族は地域と会社があって成り立つ

ど、福島にくると言ってくれたので一緒に郡山市に住み始めました。その後2年余りの間、郡山市から南相馬に2時間かけて通勤し仕事を続けていました。震災当時は、南相馬市の人口も10000人まで減り、原発のこともあってなぜ戻るかという周りからよく言われました。スタッフはみんな避難していたため、1人で仕事の対応をして、多いときは70本も80本も電話が鳴っていました。毎日毎日怒られて、1人での対応でもあり心細かったです。休みも取れなく帰るのはいつも深夜で、もう死にたいと思うときもありました。

■「なみえ」を子供たちに残していきたい
苦労して遠い職場に通勤することに、なぜやるのか？バカみたいだと周りから言われました。郡山で仕事を見つけたら、原町に家族を連れて行けばいいじゃんとも言われました。けれど、原発事故で避難している人々にはそれぞれの状況がある。この感覚は同じ状況にいる人たちでないとわからない。浪江町のコミュニティは崩れ始めているところもある。帰ろうと決めた人、新しい土地に住むことを決めた方いろいろな方がいる。でも、みんな浪江町民。なみえ焼そばを通じてルーツとしての「なみえ」を残していきたい。子どもが将来胸を張って浪江町出身と言えるような、そんな世の中にしていきたい。



(株)叶屋 叶 経道さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 舛田・嶋原
取材日：8月8日

「苦労は考えない」 (株)叶屋浪江SS 町内での事業再開第1号

現在、南相馬市に奥さんの郁子さんとお住まいの叶経道さんは、震災後すぐに動き出し、原町でガスと油の配達をなさっていました。「町内で営業ができるようになったらやる」という強い思いを実現され、7月1日に権現堂のガソリンスタンドで営業を再開されました。「大きなことは言えませんが、やるだけです。」と、おっしゃいます。

震災の日は権現堂の本社にいました。すぐにやむかと思っただけですが、横揺れがひどくどうしようもなかったのでスタンドを閉めました。川添のセルフスタンドには緊急発電の設備があったので、給油が出来ることを、警察、消防、東北電力へ伝えに行きました。それから、西病院へ自家発電の燃料があるか確認に行き、スタンドに戻って夜10時頃まで営業しました。翌朝、従業員も出社しましたが、避難命令のため閉めざるを



▲権現堂のガソリンスタンドにて

得ませんでした。それから、妻の実家の埼玉県入間市に2週間避難しました。その後、会社の保養所がある宮城県蔵王町で2年2カ月ほど暮らししました。浪江は、歩く距離で飲食が出来て用事があるところのどこにでも行けるのが魅力でしたが、蔵王に避難している時は、スーパーまで10kmもあり、遠くまで行かないと新鮮な魚も手に入らず不便でした。今年の5月16日に南相馬市のアパートへ転居して浪江に通っています。社員9人も同じアパートに住んでいます。

震災前から町内のスタンドのほか、原町で営業もしていたため、震災後も事業は完全にストップしませんでした。浪江でできる時にやる、という気持ちでした。そんな思いに親切だったのは、金融機関で、政府の助けがあって進んでこられたと思います。工事に3カ月かかりましたが、7月1日に権現堂のガソリンスタンドを再開することが出来ました。現在は、8人の従業員と営業しています。今はお客様が多くありませんが、将来、人が戻れば何とかなると思っています。いつまで悩



▲従業員の皆さんと一緒に
(左：中野良孝さん、右：佐藤友和さん)

んでもしょうがない、YESかNOかでやっています。町内に従業員がいれば防犯対策につながりますが、復興が本格化すれば町内に入る工事車両なども増えるはずだと思っています。早く地元が復興すればいいと思いますので、上下水道や道路網の復旧を出来る所だけでも進めて欲しいです。人や年代によって考え方は違うので、それぞれの所で頑張るしかないと思いますが、浪江に立ち入りした時は、ガソリンとドリンクの販売機があるので皆さんに来ていただきたいですね。



佐藤 眞敏さん・鈴子さん(請戸)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会アミル 柴田
取材日：8月9日

山形からふるさと浪江の復興を 思い続けています

佐藤さんご家族は、現在も山形県山形市で暮らしています。「浪江のこころ通信」第1号の取材当時は、慣れない土地でのアパート生活でストレスがあったそうですが、借上げから引越しし、ようやく地に足をつけた生活、落ち着いた生活ができるようになってきたと感じているそうです。

また、眞敏さんは、昨年7月から浪江町復興支援員山形駐在として、町民の皆さん一人ひとりに寄り添うサポートを目指し活動しています。



▲佐藤眞敏さん、鈴子さん
お孫さんの怜那ちゃん(3歳)、桔平くん(2歳)と一緒に

山形市に約60名の浪江の皆さんが避難していることを知り、近くに私たちと同じ気持ちで多くの方が暮らしていることに安心したことを覚えています。避難してから2年5カ月過ぎましたが、支援員として町の皆さん一人ひとりに寄り添うサポートを心がけています。企画や訪問活動を通

震災から1年の間は、山形県内のひめさゆりやぼたん、しゃくやくなどの花を見に行ったり、果物を買に行ったりと家族で様々なところに出かけました。知り合いもなく何もすることがない家族単位での生活で、外に出かけると当時の状況から解放されるといってもよかったのかと思います。今考えると狭いアパートで過ごすことや環境が変わったこと、当たり前前目には見えない精神的なストレス

スになっていたのではと思いません。昨年7月から、山形県駐在の復興支援員として活動しています。訪問活動や交流会などを行い、徐々に町の皆さんの状況がわかってきたと思います。活動では、山形県内全域の避難している世帯を個別に巡回しています。さまざまな方の話を聴き、「皆さん頑張っている、町のために私たちも頑張らなくては」と思っています。初め、同じ山

形で、町の皆さんの不安を少しでもとりのぞくことができるようなサポートを行いたい。自宅は津波の被害に遭い、原発も近く不安定な状態です。地に足のついた住まいをこちらに求めて春から借上げを出て暮らしています。アパートを出たことで、とても心が落ち着きました。戻りたくても戻れないことに焦りや不安を感じた時期もありましたが、自宅が流されなんともならない状態の中、「まずこの場所で生活をしたいかな」と、決意した時期がありました。息子夫婦もこちらで仕事を頑張っており、今家族と一緒に暮らせることに感謝しています。家族を支えながら、支えられながら、浪江町の復興を願う山形の地で暮らしていきたいと思っています。



高野 武さん(請戸)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：8月2日

再び海の仕事ができるだろうか。 不安と期待が交錯します

漁師をしていた高野さんは、次男と2人で海に出ていることもあり、後を継いでくれる息子さんに何か遺してやりたいと、この秋、新造船製作の契約を考えておられます。

しかし、国や東京電力には海への影響をもっと真剣に考えて欲しい。汚水処理のことはもちろん、放射性物質の影響について専門家や海を熟知している我々漁業関係者の声に耳を傾け、結論ありきで一方的な話しをするのではなく、再生へのさまざまな可能性を隠さず伝えて欲しい。言いたいことは山ほどあるが、このままお互いに聞く耳を持たなくなってしまうのは不幸だとおっしゃいます。



▲津波で唯一残った大漁旗を持って
(右から 武さん、母:アイさん、妻:幸子さん)

■大玉村を経由して、秋田県大仙市まで避難しました
あの日は海の潮が大きく引きました。ラジオで三陸沖に津波が到達するというニュースを聞き、地区の避難場所になっている大平山に行きました。妻は役場の隣にある避難所へ直ぐに移動し、私と息子は家へ毛布や布団を取りに一端戻りました。役場に向かう途中、請戸橋付近で水平線に白い波頭が見え、波が約10mの松林を乗り越えており、津波だと直ぐに解りました。その後、役場の4階から見たのは部落全体が波打っている光景でした。

■秋田にはいろいろ思い出があります
大仙市には翌年の5月まで滞在しました。福島県からの避難者第1号ということもあり、取材等も多かったです。市の生活環境の仕事も頂き1年間働きましたが、何しろ福島の情報が少ない上に家の船のことも気になって戻ることになり、福島市の北幹線仮設住宅に入居しました。浪江に近い原町辺りに転居したいのですが、一端県外へ避難した後に仮設住宅に越したので簡単には移れないようです。秋田に居た時から時間がたつきんありましたので、昔見た「松鳩文化刺繍」の制作に再び取り組み、大仙市を引き上げる時には市役所に贈呈し、会議室に飾って頂きました。今でもこれらの作品を見、近隣の方が時折来られますよ。



▲制作に1カ月かかった15号の大作と共に

今、食べ物や風評被害が大きくなり上げられています。秋田でも謂れない噂も幾つか耳にしました。うちには4人の外孫がいますが、謂れない差別や将来の結婚の際など、一番下の孫娘がことに心配です。また、放射能物質の身体への影響は、要らぬ心配と言われるかもしれませんが、どうなるものか誰も解らないだけに不安です。

■自治会の仕事を通じて「おか」の人たちとの交流がはじまりました
昨年度末に川口元会長が辞任され、4月から自治会会長を引き受けました。生活時間が異なることもあり、町内の人たちとの付き合い合ったことがありませんでした。でも、住民の方々がとても協力的で助かっています。支援活動団体さんも継続的に来てくださり、折々の人集めは大変ですが、平日の集会所はほぼ満杯です。広島や富山など遠方からも時折お越しになります。

復興住宅等への移住等もあり先は見えませんが、積極的に皆さんとお付き合いを深めたいと思っています。